

# 山川招魂社 エリア

## ③ 爆弾三勇士之碑

昭和7年(1932)の上海事変で、久留米の混成第二十四旅団の工兵部隊員3名が、点火した破壊筒を抱えて敵の鉄条網に突進、爆死しました。壮絶な最期は、当時「爆弾三勇士」(「肉弾三勇士」として英雄視され、全国的な報道の中で、大きな反響を呼びました。



## ④ ビルマ派遣軍龍兵団工兵五十六連隊慰霊碑／大東亜戦慰霊碑

山川招魂社には、太平洋戦争時、シンガポールからビルマへ転戦し、ビルマでその役割を終えた工兵第56連隊の記念碑があります。また、同兵団輜重兵第56連隊生存者により建立された大東亜戦慰霊碑も残されています。



## ⑤ 久留米工兵隊正門跡

高良山入口信号に隣接して、久留米工兵隊正門跡が残ります。敷地内には、前掲の「爆弾三勇士」の功績を称えるため、当時の日本足袋株式会社社長・石橋正二郎からの寄贈で、記念館が建てられました。館内には、坂本繁二郎が三勇士を描いた油絵が飾られていたといわれています。



## ⑥ 耕心園碑

かつて久留米工兵隊作業場であったこの地には、「爆弾三勇士」(「肉弾三勇士」)の記念碑がありました。上海郊外での戦闘で、壮絶な戦死を遂げた3名の武勇を長く後世に残すため、地元有志により昭和8年(1933)年に建立されたものです。

その後、塔に設置されていたレリーフは、金属供出により失われ、台座のみが残りました。

終戦後、この地は「国立園芸試験場九州支場」となり、やがて「九州農業試験場園芸部」と改称されました。その10周年記念を迎えるに当たって、新たに「耕心園」の碑銘が刻まれ、現在に至ります。

※⑥⑦の見学には、九州沖縄農業研究センター(筑後・久留米研究拠点)の許可が必要です。

## ⑦ 久留米工兵隊之跡碑

久留米工兵隊とは、この地に創設された工兵第18大隊(明治42年(1909)～)と、工兵第56連隊(昭和16年(1941)～)のことを指します。両隊とも、終戦とともに解散しました。この碑は、隊の出身者有志により建立されたものです。



## ⑧ 忠霊塔

昭和16年(1941)、陸軍墓地規則改正により、陸軍墓地内に忠霊塔を設置することが定められました。同時に、個人墓は廃止され、忠霊塔に合祀されることになりました。

忠霊塔は、高さ17m、幅3m、徳山産花崗岩に渡辺正夫陸軍中将(第56師団長)が揮毫した「忠霊塔」の字が刻まれています。

納骨所は、高さ6m、幅8m、正面幅23mあり、外面には花崗岩が張り詰められています。ここに、陸軍埋葬地(前掲②)から移された4,030柱と新たに合祀された1,018柱が安置されています。また、旧陸軍墓地にあった墓石は、塔の背後に埋められています。

## ⑨ 参道

幅28mの入口にある灯籠は、靖国神社のそれを模したものです。幅10mの中参道を経て、陸軍橋(⑬)へ続きます。両側に春日灯籠36基が並びます。楠は昭和15年(1940)に旭屋デパート社員が、栗・銀杏・山桃などは翌年に久留米郵便局職員によって植栽されました。

## ⑩ 円形野外講堂

500人を収容する規模の野外講堂で、ステージとベンチが円形に配置されています。構造は、鉄筋を使用せず、ガラレンガ(セメントレンガ)を積み、モルタルで仕上げられています。

ステージは、中央に演台、裏に楽屋の痕跡が残り、壁面には「養其神」(自己の精神の長い修養に努めなさい)と書かれた額と黒板2枚が設置されています。ベンチは、扇状に3列、それぞれ上下2ブロックに分けられ、その間は通路になっています。

全体的に円を基本とした設計理念は昭和前期には類例がなく、極めて貴重な遺構です。竣工式と鎮霊祭では、地元女子青年団による奉納舞踊などが行われたことが知られています。



## ⑪ 遥拝台

陸軍墓地最高所(標高50.3m)にある赤レンガ造りの塔です。外見は裾広がりの円柱状で、高さ48m、底部径6m、屋上径5.8mの大きさです。内部の螺旋階段を上ると、屋上中央の祭壇に立つ花崗岩製の標柱には「宮城遥拝」と刻まれ、東方の皇居に向かって参拝する形になっています。



## ⑫ ドイツ兵俘虜慰霊碑

第1次世界大戦で、久留米俘虜収容所には1,300名程のドイツ兵捕虜が収容され、5年3ヵ月に及ぶ収容生活中に11名が亡くなりました。慰霊碑は、捕虜たちが帰国に際し建立したものです。石碑側面には故人の姓が刻まれ、背面の台座には鎮魂の言葉が記されています。



## ⑬ 放生池／陸軍橋

放生池に架けられた高さ15m、幅8m、長さ21mの橋です。鉄筋が入らないコンクリート造のアーチ橋です。欄干の親柱に嵌め込まれたプレートには、「陸軍橋」「りくぐんばし」「昭和十七年四月竣工」の銘があります。



## ⑭ 臨川台

眼下に高良川を見下ろす台地の先端部に、石を積んで造られた展望台で、コンクリート製の手すりとは花崗岩製のベンチが設置されていました。展望台から階段を下りると、高良川との境に「陸軍」境界標が残っています。



# 陸軍墓地 エリア

## ① 山川招魂社

明治2年(1869)、久留米藩11代藩主有馬頼咸の命により、山川村に招魂所が創建されたことに始まります。ここには、幕末の動乱期に国事に奔走し殉じた真木和泉守保臣以下37名及び佐々金平の招魂墓が造られました。また、真木らと藩政改革を企てるものの嘉永の大獄で逮捕幽閉され、自刃した稲次因幡正訓の墓もあります。

明治6年(1873)には、三潯県大参事の提唱により高山彦九郎の祠堂が建立され、御楯神社が創建されました。これが数度に渡り社名を改め、昭和34年(1959)に「山川招魂社」となって今日に至ります。

## ② 陸軍埋葬地

明治6年(1873)、陸軍発足に伴い、従軍者は陸軍埋葬地に葬られることが規定されます。これにより、山川村に設立された招魂所に陸軍埋葬地が併設されました。後にこれが野中村に移転、陸軍墓地となりますが、明治維新から西南戦争に殉じた戦没者は今もここに眠っています。

